

でした。母は生きた心地がしないほどやせているにも関わらず、子どもたちのことを一生懸命考えてくれていました。母のことを想うと本当につらい気持ちになります。

もどれなかった父

父は太平洋戦争で戦死しました。昭和20年4月22日に東成区役所から戦死公報がありました。わたしたち家族4人と親せきで父の遺骨を区役所まで受け取りに行きました。家に帰り骨壺を開けると、折れた「割ばし」が3つ入っていました。骨ではなく「割ばし」です。だれが入れたのかはわかっていません。

父は南太平洋のアンボン島で戦死したと聞いていますが、本当にそこで亡くなったのか真実はわかりません。同じ部隊の人はみなさん亡くなられています。

遺骨が帰ってこないことはよくあることでした。わたしたちの父だけではありません。ほかでは骨壺に石が入っていたというお話も聞きました。そういう時代でした。

家族と友だちがいる幸せ

そのような状況の中でも、家族の絆はとても強かったです。家族4人で寄りそって毎日を過ごしました。食べものは粗末でも、4人そろって食べたとても美味しかったです。お腹が減ってつらい目にあっても、家族がそろっている時が何より幸せでした。

戦後は学校生活も楽しいものでした。縁故疎開や集団疎開で離れていた友だちがみんな東成区へもどり、学校に集まったからです。そうして友だちと集まり、学校で学べることは素晴らしいことだと感じました。

戦争を知らない世代へのメッセージ



全国に語り部の方が大勢いて、子どもたちに伝えていくことはとてもいいことだと思います。

しかし、語りつぐことの大切さは理解していますが、戦争のことを思い出すと悲しい気持ちになります。苦労したことは忘れてしまいたいですね。

わたしが、今の平和を守るためにみなさんにお伝えしたいことは、「戦争がおこる・おこらないは、本人の考え方ひとつ。」だということです。みなさんは、学校などで戦争について勉強していると思います。色々な視点で様々な意見があると思います。

戦争をくり返さないためにどうしたらいいか、平和であるためにどうしたらいいか、みなさんお一人おひとりに考えていただきたいですね。



戦後の生活は、苦しみの連続でした。

空襲で兄を失った大隈さん。
毎日生きていくのに精一杯で、
学校にはほとんど行けませんでした。

おおくま ますお
大隈 満洲男さん(当時11才)

言葉にできない悲しみの記憶

当時わたしは11才でした。わたしには兄がいましたが、頭に焼夷弾の直撃を受け亡くなりました。頭の一部が飛んでしまい、そこから下が無くなっていました。それがトラウマとなって、記憶の有る無しに関わらず、戦争について語る事ができませんでした。今まで語り部としてお話をするチャンスはありましたが、自分の中での整理ができずにいました。戦争というのは亡くなる方だけでなく、生き残った人にも影響があるということです。

兄が亡くなり、家庭がうまくいかなくなっていきました。小さいわたしには何もできませんでした。戦争のお話にも、様々なものがあるということを知っていただきたいです。だれが死んだという事実だけではなく、実際にその内容を説明しようとすれば言葉が出てきません。

本格的な空襲にあったことは1度だけです。戦時中ももちろんつらかったですが、それ以上に兄の突然の

死で家族が大きく変わってしまった戦後の生活は、苦しみの連続でした。

兄との思い出

兄のことは断片的な思い出しかありません。兄はわたしより知恵がまわる人で、ひもじい時代だから家の中のものを盗み食いすることもありました。母が隠していた砂糖を食べて、それをわたしがやったと母に言いつけたのです。わたしが否定などすれば、後で兄に叩かれるため何も言い返すことは出来ませんでした。母にさんざん怒られても、黙って泣くだけです。



「家族写真」提供：大隈満洲男さん